

第二次世界大戦史研究の最先端

令和元年5月11日

青山学院大学大学院国際マネジメント研究科

福井義高

I . 第二次世界大戦の背景

1. 第一次大戦の延長戦

- パワーポリティクスとイデオロギー
- 統一以来の難題であるドイツのあり方
- 世界を支配する欧州から世界のなかの欧州という流れ
- パクス・ブリタニカから米ソ二極支配へ

2. 国際(*international*)からグローバルへ

- イギリス
 - 勢力均衡の調停者
- 米ソ
 - 「普遍的」価値観の伝道者

3. 戦争観の転換

- 対等な敵同士による限定戦争
- 正義が悪(犯罪者)を成敗する「警察行動」
- 独皇帝戦犯指名とドイツ「単独責任」
- ジュネーブ議定書の挫折
- 「無意味な」不戦条約の成立

4. 主役は米英ソ

- 自給自足、つまり長期戦可能なのはこの三国だけ
- 戦勝国史観と一体なったヒトラー中心史観への疑問

5. 日本の存在

- 日露戦争後、列強 (great powers) の仲間入り
- パクス・ブリタニカの「優等生」
- 文明と非文明
- 勢力圏 (sphere of influence) の承認

6. イギリス支配層の対立

- チェンバレン、ロイド＝ジョージ
 - ドイツの大陸での優越を前提とし、列強の協調で欧州の自主独立
- チャーチル
 - 米ソを利用してドイツを倒しパクス・ブリタニカを旧来のまま維持
 - 逆に利用され大英帝国は崩壊

7. アメリカ支配層の対立

- 第一次大戦参戦に幻滅した国民に支えられた孤立主義者
- ルーズベルトを指導者とする国際主義者（グローバリスト）
- 米英の「特別な関係」は第二次大戦後の神話

8. 革命家スターリン

- フルシチョフの嘘
- リアリストであり革命家
- まず、欧州制覇を目指し着々と準備
- 世界恐慌後の混乱下、善隣外交でカムフラージュし、史上最大の陸軍建設
- 満洲事変を口実に軍拡加速、準戦時体制
- 日本との二正面作戦を避け、主敵はドイツ
- スターリンに従属する毛沢東・中国共産党

9. コミンテルン＝スターリン

- コミンテルンはソ連共産党の一部門
- 各国共産党はソ連共産党の海外支部
- ソ連共産党はスターリンの完全支配下

10. 対米工作

- ヴェノナ文書、ヴァシリエフ・ノートで疑問の余地なく示された、政府上層部にまで浸透した巨大なスパイ網
- マッカーシーの主張は一般論としては正しかった

11. 対日工作

- モスクワ大使館金庫内情報まで筒抜け
- 張作霖爆殺？
- 張鼓峰事件
- ノモンハン事件？
- 満洲白系ロシア人のリーダーはソ連スパイ
- なぜか軽視され続ける黒宮広昭インディアナ大教授の研究

Ⅱ．第二次大戦への道と現在

1. ヒトラーの目的

- イギリスとの協調を前提に、地続きの自給自足圏を確立
- ヒトラーというよりドイツの悲願
- 英独仏伊のConcert of Europe

2. ヒトラーとムソリーニの化かし合い

- 英独を天秤にかけるイタリア
- エチオピア戦争で急接近
- エチオピアを密かに支援するドイツ
- ドイツ(オーストリア)国境防衛を強化するイタリア

3. スペイン内戦とソ連

- 非共産党の共産主義者主導の共和国
- ソ連の介入で傀儡化
- コミンテルンの宣伝網がフル回転
- 「お人よし」の徹底的利用とオルテガによる非難

4. スペイン内戦と独伊

- 第二次大戦とは無関係
- イタリアに比べドイツの支援は限定的で、ヒトラーは内戦長期化を画策
- 第三国を通じて、ドイツは共和国側に武器売却

5. ドイツのポーランド侵攻

- 始まったのは世界大戦ではなく、二国間の限定戦争
- ワイマール共和国時代、党派を超えてポーランドを敵視
- 対ソ緩衝国とみなし宥和的だったヒトラー
- 英仏を手玉に取ったつもりで、ドイツを挑発するポーランド
- 英仏宣戦布告によるヒトラーの「政治的死」

6. ドイツの対仏勝利と裏口からの参戦

- ルーズベルトに支えられたチャーチル
- ヒトラーの「寛大な」和平条件を拒絶し、世界大戦にエスカレート
- ルーズベルトの挑発に乗らないヒトラー
- 孤立主義を葬ったパールハーバー

7. いまだ第二次大戦後の現在

- 第二次大戦の延長戦である冷戦勝利によって、米一極支配が完成
- スターリンの公式「デモクラシー対ファシズム」が純化・永続化

参考：独ソ戦に至るスターリンの発言

1. 1925年1月19日

共産党中央委員会総会演説

戦争がはじまれば、手をこまねいているわけにはいかないであろう、一われわれは、のり出さなければならないであろう、もっとも、いちばんあとでのり出すのであるが、われわれは秤皿に決定的なおもりを、相手かたを圧倒しうるようなおもりを、なげいれるためにのり出すであろう。

(スターリン全集刊行会訳)

2. 1937年11月18日 国民政府代表団への発言

ソ連は現時点では日本との戦争を始めることはできない。中国が日本の猛攻を首尾よく撃退すれば、ソ連は開戦しないだろう。日本が中国を打ち負かしそうになったら、その時ソ連は戦争に突入する。

3. 1938年2月7日

国民政府立法院長孫科への発言

歴史というのはふざけるのが好きだ。ときには歴史の進行を追い立てる鞭として、間抜け(дурак)を選ぶ。

4. 1938年10月1日

共産党プロパガンダ担当者会議での発言

戦争が正義であり、状況が適切であり、条件が好都合であれば、自ら攻撃を開始するのだ。ボルシェビキは攻撃に反対しているわけでは全然ないし、全ての戦争に反対してもいい。今日、我々が防御を盛んに言い立てるのは、それはベールだよベール。

5. 1939年9月7日

コミンテルン書記長ディミトロフへの発言

この戦争は二つの資本主義国家群(植民地、原料などに関して貧しいグループと豊かなグループ)の間で、世界再分割、世界支配をめぐり行われている。我々は、両陣営が激しく戦い、お互い弱めあうことに異存はない。ドイツの手で豊かな資本主義国、特にイギリスの地位がぐらつくのは、悪い話ではない。ヒトラーは、自らは気付かず望みもしないのに、資本主義体制をぶち壊し、掘り崩しているのだ。...

我々は、さらにずたずたに互いに引き裂きあうよう、両者をけしかける策を弄することができる。不可侵条約はある程度ドイツを助けることになる。次の一手は反対陣営をけしかけることだ。

6. 1941年5月5日

陸軍大学卒業レセプションでの発言

（赤軍少将がスターリンの平和外交に乾杯と言ったのに対して）

訂正させてもらいたい。平和政策はわが国の平和を保障してきた。平和政策はよかった。我々はこれまで、最新の武器を備えた軍隊に近代化するまで、防衛の線で進めてきた。

しかし、我が軍を再編し、現代的戦争に向けた技術で充実させた今、我々が強くなった今、防衛から攻撃に移らねばならない。

我が国を防衛するには、攻撃的方法で実現しなければならない。軍事政策を防衛的なものから攻撃的なものに。我々の教育、プロパガンダ、アジテーション、印刷物を攻撃的性格のものに作り直すことが必要だ。赤軍は現代的軍隊であり、現代的軍隊とは攻撃的軍隊（армия наступательная）である。